

表紙にちなんで

橋 寺 知 子

なにわ大阪研究センター研究紀要の表紙は、本センターが所蔵する赤松麟作の版画集「大阪三十六景」を用いている。この版画集は1947（昭和22）年に発刊されたものだが、赤松が描いた大阪の情景は、戦前期の最も豊かで活気のあった頃の風景と推測される。ここでは、表紙にちなんで、風景に表れた大阪の近代をふりかえってみたい。

「本町」

第2号の表紙は「本町」である。本町は商都大阪の中心であり、大阪メトロ・御堂筋線の本町駅、交差点なら御堂筋と本町通、あるいは高速道路が走る中央大通の交差点がイメージされると思う。だが、この画に描かれている交差点は、御堂筋ではなく、堺筋と本町通の交差点である。

画には市電の軌道が交差点で交差し、赤い市電の車両が3両描かれている。今でこそ、1937年に開通した御堂筋が大阪の南北のメインストリートで、地下鉄御堂筋線が梅田と難波を結ぶ市内交通の中心的存在だが、御堂筋が拡張される以前、つまり大正期のメインストリートは堺筋だった。明治末、堺筋は拡張され、市電が開通し、歩道や街路樹も整えられた。北浜には株式取引所があり、その付近には株仲買人の事務所や銀行本店が多く所在した。また、沿道には三越（北浜）、白木屋（本町）、高島屋（長堀橋）、松坂屋（日本橋）と、百貨店も多く建設された。

画の中央奥にビルが3棟描かれている。中央の小さな塔状のものがついている建物が、白木屋呉服店大阪支店である。白木屋は、清水組（現・清水建設）の設計施工で1921年に竣工、にぎやかな意匠に、モダンな‘デパートメントストア’の華やかさが表われている。その左側（南側）の建物は、野村ビルディング（野村銀行）である。野村銀行は、大阪の両替商を出自とする大阪発祥の銀行である。戦後、大和銀行に名称変更し、現在のりそな銀行に受け継がれる。野村ビルディングは関西の建築界の重鎮・片岡安（1876-1946）が主宰する片岡建築事務所の設計で、1924年に竣工、8階建てで、当時としては高層建築である。低層部の装飾は銀行らしく重厚だが、中層部はあっさりとしたモダンな印象だ。白木屋の右側（北側）に描かれているビルは、位置関係はちょっとずれているのだが、山口ビルディング（山口銀行）と推測できる。山口銀行も大阪の銀行だが、1933年に鴻池銀行、三十四銀行と合併して三和銀行となり、現在は三菱UFJ銀行である。1923年に竣工、こちらも片岡建築事務所の設計で、ルネサンス様式の8階建てである。

市電の軌道が交差する交差点は大きく隅切りされていた。市電が廃止された今も、その痕跡は残る。モダンな高層ビルが通りに建ち並び、市電も人も車も、入り乱れつつ盛んに往来する様子は、だいおおさか「大大阪」と呼ばれた頃の、活気にあふれた大阪都心の風景である。



「堺筋本町交差点 昭和初年 望北」1926年
 (大阪市立図書館デジタルアーカイブより)
 左の大きな建物が野村ビルディング



「堺筋安土町より望北 左側手前より野村銀行、
 白木屋、山口（三和）銀行の順に並ぶ」1929年
 (大阪市立図書館デジタルアーカイブより)



周辺地図

「中央公会堂」



遅ればせながら、第1号の表紙についても記しておきたい。第1号は「中央公会堂」、中之島東部にある近代建築で、大川（旧淀川）が分かれた土佐堀川、堂島川に挟まれた中之島にある。中之島東部地区には公会堂のほか、大阪府立中之島図書館や日本銀行大阪支店といった近代建築が建ち並び、水都大阪の代表的な風景の一つである。

この画では、公会堂はあまり大きく描かれていないが、建物の中央上部の大きなアーチ窓とその両側の丸い銅板葺の屋根で、公会堂とすぐわかる。大阪

市公会堂は、大阪の株式仲買人・岩本栄之助の寄付によって建設された。アメリカで富豪たちが公共事業等に私財を投じることを知った岩本は、帰国後、大阪市に100万円を寄付、しかし公会堂が完成する前に岩本は事業に失敗し、1916年に自殺を図り、公会堂の完成を見ることはなかった…、公会堂の誕生物語はドラマティックだ。

1912年に指名設計競技が実施され、岡田信一郎（1883-1932）が最優秀に選ばれた。案を提出した13名は当時の一流建築家たちで、岡田は最年少の29歳であった。ネオ・ルネサンス様式で、華やかで若々しいデザインであった。その案をもとに財団法人公会堂建設事務所が、と言っても実質的には辰野金吾と片岡安の辰野片岡建築事務所を中心に実施設計がなされ、1918年に竣工した。辰野金吾（1854-1919）は、日本銀行の本支店や赤煉瓦の東京駅丸の内駅舎など、明治・大正期の国家的建築を多く手がけた建築家として知られる。片岡安（1876-1946）は、「本町」の項でも登場したが、日本の都市計画や法整備において重要な役割を果たし、大阪の近代建築を語る上では欠かせない。赤煉瓦と白い花崗岩を組み合わせさせた意匠は「辰野式」とも呼ばれ、辰野が東京駅など後期の作品によく用いた。中之島に現存する近代建築では赤煉瓦は公会堂のみで、一番絵になる存在だ。

東の難波橋から公会堂正面の広場へ一直線に延びる道は西洋的な感じがするが、実は明治期には、現在の公会堂の位置に豊国神社があり、絵に描かれた道は「参道」だった。豊国神社は1880年に創立されたが、公会堂建設のため1912年に図書館西側の公園内に移転、1956年、大阪城内の現在の位置に再度移転した。大正末の大阪パノラマ地図を見ると、豊国神社は図書館の西にあるが、大阪ホテル東側には鳥居が残る。現在、大阪ホテルの場所に大阪市立東洋陶磁美術館が建ち、美術館東側には「木邨長門守重成表忠碑」がある。木村重成は大阪夏の陣で没した豊臣方の勇将で、中之島とも美術館とも、直接的な関係はない。この碑は、大阪府知事を務めた西村捨三が發起人となって1896年に豊国神社境内に建立したものだそうで、豊国神社の置き土産と言える。

2020年春、美術館東側に「こども本の森中之島」が開館するのに合わせ、難波橋から公会堂までの区間は、歩行者空間化（公園化）された。文化施設、中之島公園の緑、水辺のプロムナードが一体となった空間となり、画に描かれているような、人々がゆったりと逍遙する風景がまた見られるかもしれない。

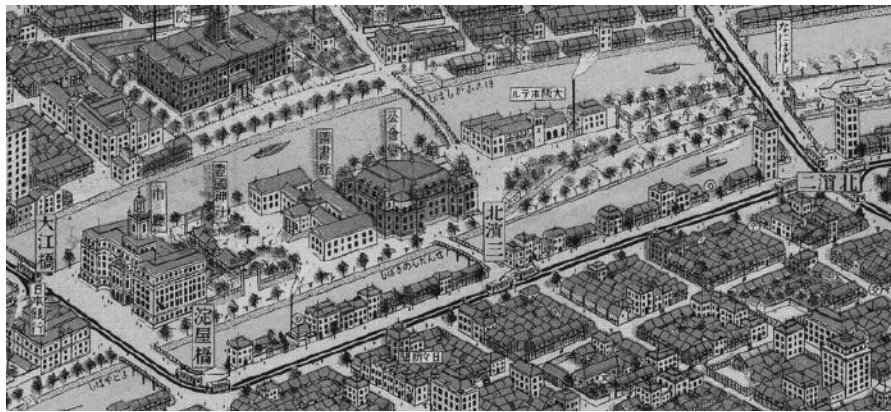
（はしてら ともこ 関西大学環境都市工学部准教授）



「(大阪名所) 中の島公会堂」1921年以降
(大阪市立図書館デジタルアーカイブより)
中央公会堂の奥に図書館(1904年)、旧大阪市
庁舎(1921年)が見える。



木邨長門守重成表忠碑(右)と公会堂



大阪パノラマ地図(1924年)



周辺地図